

龍谷大学世界仏教文化研究センター 学術講演会

講演名	仏典梵文写本のチベットにおける借覧状況について
開催日時	2017年3月7日（火）15:30～17:00
場所	龍谷大学大宮学舎清風館 3階共同研究室 1・2
講演者	加納和雄（高野山大学准教授）
司会	大澤絢子（龍谷大学世界仏教文化研究センターRA）
開会の辞	能仁正顕（龍谷大学世界仏教文化研究センター長、文学部教授）
主催	龍谷大学世界仏教文化研究センター、仏教文化研究所 （若原雄昭研究PJ「仏教写本の総合的研究」）
共催	龍谷学会
参加人数	25人

【講演のポイント】

高野山大学准教授で、仏典を中心とする梵文写本の研究者である加納和雄氏による講演。従来、インド仏教思想の内容解明に有用なテキスト資料とみなされることの多かった仏典梵文写本に、歴史資料としての別の意義があることが指摘された。すなわち、仏典梵文写本の読解を通じて、インド・チベット間の文化交渉史が解明される可能性、および、その具体的な方法論について議論が試みられた。

【講義の概要】

講演は、以下の6章から成る。

1. 通常の植生分布に沿った写本素材の使用
2. 人的移動と越境による写本素材の使用の特殊な例
3. 写本と文字の特殊な組み合わせの例
4. 写本研究について
5. 先行研究
6. 11～13世紀における蔵伝梵文写本の歴史的分析

1. 植生分布に沿った写本素材の使用

序論として、植生分布と仏典写本の素材、および写本に用いられる文字の間の密接な関係について概説が試みられた。サンスクリットで記された仏典写本の素材には、基本的にヤシの葉を加工した貝葉か、樺皮が使用される。それは、インド各地にヤシの木が生えていること、

また北インド、カシミール、ネパールにはヤシが生えない代わりに、樺が多生しているという同地の植生分布と深く関係している。

その一方で、植生の関係で、貝葉も樺皮も手に入りにくいチベットでは、紙が写本の素材に選ばれ、チベット語の仏典写本は、基本的に紙でできている。

2. 人的移動と越境による写本素材の使用の特殊な例

3. 写本と文字の特殊な組み合わせの例

ただ、今日残される仏典写本の素材と使用文字の関係はもう少し複雑である。加納氏によると、チベット語が書き込まれた貝葉・樺皮の仏典写本、あるいは、紙でできたサンスクリットの写本等、植生分布に反した素材と言語の組み合わせの写本も、チベットあるいはネパールに伝えられる。このような写本の素材と使用言語の「ズレ」が何故生じたかということ、人的移動が大きく関係している。10世紀から13世紀にかけて、仏教者がインド～チベット間を盛んに往来したことで、上述のような仏典写本が製作されたという。

4. 写本研究について

5. 先行研究

以上、写本の素材と使用言語の関係性に関する概説の後、仏教の文献研究、およびそれにもとづく応用研究の階層に言及し、その中の仏典写本研究の位置づけについて、先行研究を踏まえて議論がなされた。結論からいえば写本は、文献研究におけるもっとも基礎的な対象物に該当し、この写本の翻刻・校訂・翻訳作業の上に、思想の内容分析と解説が位置づけられる。

6. 11～13世紀における蔵伝梵文写本の歴史的分析

加納氏によれば、梵文写本の研究には、次の二つの方向性が想定される。すなわち、①写本を「内容解読研究」のためのテキスト資料として用いる方向性と、②「写本伝播史の研究」のための歴史資料として用いる方向性である。前者においては、インド仏教の思想内容が解明の対象となり、後者の場合、インド・チベット間の文化交渉史が解明の対象となる。講演の締めくくりとして、第二の方向性の意義と、具体的な方法論に関する議論が試みられた。

具体的には、梵文写本の奥書の詳細な検討を通じて、写本が複雑な経緯で成立・流通していること、さらに、その用途等についても考察がなされた。

【まとめ】

仏典梵文写本を研究する際のもう一つの視点として、「歴史研究」が挙げられる。梵文写本には、石碑等に類比される「歴史資料」としての重大な意義があり、とりわけ、その奥書の分析は、インド・チベット間の豊かな文化交流史の知られざる側面を明らかにする可能性がある。

【文責】 龍谷大学世界仏教文化研究センターRA 亀山隆彦
PD 唐澤太輔